

<無文字文化>論まとめのためのメモ

I <無文字文化>ということ—<等分線による「日本」美術史年表>を眺めながら。

15000年という長い歳月に埋め込まれた沈黙の営みに思いを馳せること。

II 三つの視点

① 歴史過程；経緯

どのようにして<無文字文化>は生まれたか。そして<文字文化>が定着したか。

イ.声（縄文土偶土器）→ロ.形・文様としての文字漢字（金印、須恵器）→ハ.漢字表記文・音読された文字漢字（石上神宮七支刀）→ニ.漢字訓読音読文＝倭音に相当する漢字で文字化（稲荷山古墳金象嵌鉄剣～法隆寺釈迦如来光背銘〔真〕～伝聖徳太子「法華義疏」〔真〕、空海「風信帖」〔行〕、醍醐天皇「白氏文集」〔草〕<三体>が揃う）
→ホ.表記は音訓併用漢字文→万葉仮名・書記は草体仮名書へ（伝藤原行成「升色紙」、伝紀貫之「寸松庵色紙」etc.）
イ.ロ.ハ.ニ.ホ.の過程にあつて<見立て>の方法意識が成熟していく。

② 原理と働き

どのようにして<無文字文化>は<文字文化>を生かしており。生かしてきたか。

その原理；「反者道之動、弱者道之用、天下萬物生於有、有生於無」（老子40章

「有」は<文字文化>、「無」は<無文字文化>。『老子』は書物となつて<文字文化>の産物だが、
文字文化以前の思想を語っている。 …あるいは『古語拾遺』。

その働き；<見立て>と<三体（真行草）>

③ 現在に生きる<無文字文化>

III<無文字文化>時代に育った、表現衝動の起源（身体反応）—①

a 聞く⇔歌う⇔誦む⇔暗誦する⇔語る⇔踊る→声 真 伝

b 触る⇔握る⇔削る⇔結ぶ⇔捨てる⇔編む →身 似 え →文字を読む／書く

c 見る⇔覗く⇔線を引く⇔染める⇔塗る⇔ →体 る る

IV<無文字文化>が遺したもの—②

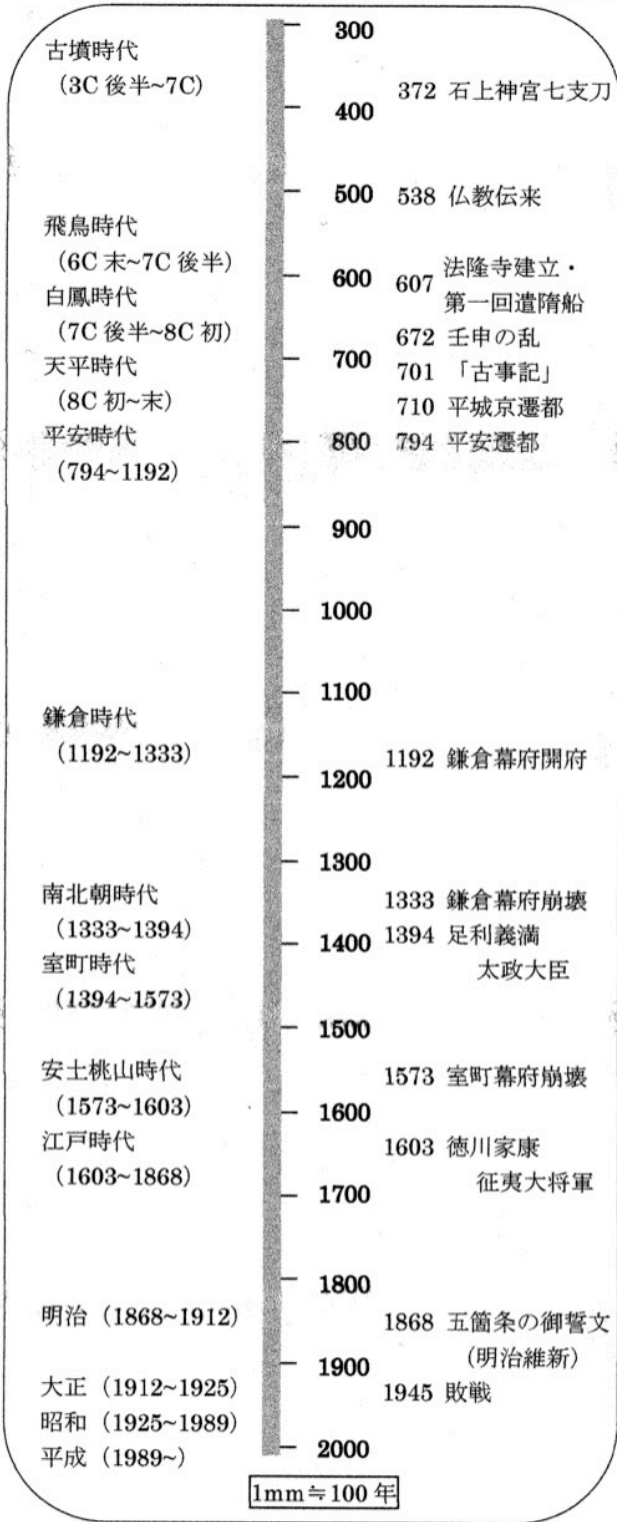
<見立て>という方法。その方法を活かすための三つの型（体）としての<真行草>。

<文字文化>が成熟してくると、中国から輸入した<三体（真行草）>の<型>がその<方法>に生かされるようになる。

とくに、真=楷、行、草の<三体>のうち、<草>は日本列島にあつて独特の展開を遂げ、平安時代初期に創られた、<草仮名>以来、江戸時代に至るまで、硬化した時代の表現を脱却し生気を吹き込む役割を果たしてきた。

近代に入っても、現代に至っても<草>の精神は生きている。—③「漫画」（法隆寺落書、鳥獸画卷から水墨、CDアニメまで）

年表B 拡大図 (古墳時代から現代まで)



年表A 全体図

